

「ユニバーサルの視点」等に係る福祉関係者からのヒアリング（概要）

1 日 時 平成21年8月5日（水）13：15～14：00

2 場 所 西陣産業会館

3 面会者 谷口明広 愛知淑徳大学医療福祉学部教授

4 ヒアリング概要

- ・ 「ユニバーサル」とは、誰もが安心して安全にらせる、普通にらせるための仕組みだと考える。
- ・ 特別な存在があるのではない、一人だけが苦勞するようなことがないような環境にすることである。
- ・ 障害のある人や高齢者の存在を念頭にして、使いやすくしておけば、それは全ての人々に適したものになる。元々は、目の見えない人がシャンプーとリンスを識別できるように、ボトルの天辺に印をつけたのが始まりで、女性が髪を洗うときなどに手探りでも区別できる商品として定着したという例がある。
- ・ また、「ユニバーサル」は実践的なイメージが込められている。より具体的な形にしていこうというもの。（一方で、「ノーマライゼーション」は意識の問題、理念的なイメージが強いと思う。）
- ・ 知事がよく話される「共生のまちづくり」にもよく通じる考え方だと思う。誰でも同じように生きていけること、特定の人だけが苦勞したりするのは違っている。
- ・ わかりやすさということからは、表示の仕方の工夫が未だ十分でない。駅にしてもエレベーターが後から付けられているから、駅毎に場所が違う。電車の何両目がエレベーターに近いのかというような案内の工夫が必要。
- ・ 高齢化が急速な社会であるからこそ、「ユニバーサル」の考え方を入れなければ成り立っていかない。ビジネスの世界においても、「ユニバーサル」に対応できなければ、売り上げが落ちていくのが現実。
- ・ 同じように使われるが、「バリアフリー」はどちらかというと非生産的なイメージ。なぜなら、これまでバリアのあるものをたくさん生みだしておきながら、後からそれを解消しようというものであるから。「ノーマライゼーション」も同様で、元はアブノーマルな状況や考え方をノーマルに戻そうとするもの。
- ・ 「ユニバーサル」はそういった前提なしに、一からやっ払いこうというイメージがある。共に目指していくというもので、前者より上位概念だと考えている。
- ・ 同じような意味で、「インクルージョン」という言葉もある。社会の中に一体として包まれているという考え方。「ユニバース」にもひとつという意味がある。
- ・ 高度経済成長期には、障害のある人や高齢者は足手まといとして捉えられていた。経済的な効率性という価値に合わない存在として位置づけられていた。現在の社会を見ると、その価値が大きく変わろうとしている。
- ・ 行政や地域への参画の観点からいえば、選挙制度も未だユニバーサルにはほど遠い状況である。郵便投票は自書でなければならないし、投票用紙への代筆を依頼するためには投票所へ出向かなければならない。その上、バリアフリーでない投票所はいくらでもある状況。
- ・ 障害者の声は非常に大きいと思うが、現行の制度ではそれが行使できない。そういった点からも、投票率100%は絶対にあり得ない数字のままである。